

# デジタルオーディオプレイヤー「D-snap」レポート

平成19年12月27日

## 1. はじめに

現在、携帯オーディオプレイヤーは広く普及しており、インフラも整備されつつあります。このオーディオプレイヤーは、筋ジストロフィーをはじめとする、運動機能障害を持つ人にとってはどのようなものなのかをレポートという形で表しました。

今回運動機能障害をもつ人にとっての携帯オーディオプレイヤーの導入による操作性、や機能性から見た結果を考察としてまとめ、開発の参考となれば良いと思います。

## 2. 対象

国立病院機構八雲病院一病棟 他入院者数名

## 3. 期間

12月3日～12月14日	ベット上使用
17日～26日	車椅子上使用

## 4. 調査

この調査では期間を定め実際に使用し、アンケートを数名にとり作業環境場面の違いを操作性や機能性でまとめました。

## 5. 作業環境場面での違い

### (1) ベット上での使用

ベット上では本体を体の横に置いての使用

#### 操作性

- ・スイッチは音階が順番にわかれているので、目でみえなくてもできるところがいい。
- ・データを転送するときに、コードがワイヤレスになっているといい。
- ・機械に付属しているイヤホンだと、周りの音が聞こえない。音が聞こえないと、声をかけられても気づかない。
- ・画面が見えやすくなって欲しい。
- ・パソコンに入れるソフト→シンプルな操作で使いやすかった。
- ・立ち下がりの変速の変更
- ・操作時の音量が大きい。
- ・6段階目（ソ）の音があまりきこえないような感じがする。

## 機能性

- ・本体に、スイッチでできる、うごかなくする HOLD 機能がほしい。
  - ・再生とか、曲の順番音量以外の入っている機能が使いたい。
- ノイズキャンセラー機能などを使ってみたい。
- ・電池がへらないので。よかった。
  - ・本体をはめ込んでほしい。
- 置くときに、大きさの違いがあると、埋め込み式だといい。

## ベット上で使ってみての感想

ベットで使うにあたって最初に思ったのは、「スイッチの表示を見ずに操作できるのか？」でした。それは事前に使ったときに、ランプの位置と表示を見ながら操作していたので目で見ずにできないのではないかと思ったからでした。ですが実際に使ってみると、スイッチごとに音階が変わっていきそれをたよりに操作することができました。音だけの操作でも慣れるとスムーズな操作が可能になりました。ベット上だと手の可動範囲が狭まるので、スイッチを頼りにしての操作になってしまうので、直接目で見ての操作をしたい場合はベットにアーム等で固定する必要がありました。

## (2) 車椅子での使用

車椅子では本体をアームに固定し、車椅子のコントローラ付近に設置し使用。



- ・画面の注視に気がつけたほうがよい。(運転中)
- ・車椅子に乗りながら(散歩しながらなど)で音楽を聴けるのでより気分転換になる。
- ・疲れたときには車椅子のリクライニングを倒して休憩しながら聞くこともできる
- ・機械を操作することで運転の妨げにならなかったのがよかった。
- ・リハビリをしながら、作業をしながら聴くこともできる。(片手が使える場合)
- ・スキャン入力の間隔が丁度良かった。
- ・こういう方法で車椅子で音楽が聴けるなら、ぜひ聞きたい。
- ・車椅子に付けるパーツ(アーム)も一緒に発売して欲しい。
- ・時計を付けて欲しい。画面上で確認できる

## 感想

実際に車椅子上で使用してみて、今まで車椅子で音楽を聞くと言うことは無かったので新鮮みを感じました。走行しながら、休憩しながら、リハビリしながらなど色んな状況で使ってみるといつもよりもリラックスすることができました。このオーディオプレイヤーだけにかかわらず、手足が不自由な人によって自分で操作し、好きな音楽を聞くと言うことは少なからず生活にゆとりが生まれるのではないかと思います。それぞれの日常に誰もが使えるオーディオプレイヤーがあってもいいのではないかとそう感じます。

## 6. 入院者にとって音楽とは？

入院者 10 名にとっての音楽とは？という質問を聞いてみると、楽しみや癒しという答えが多数でした。やはり音楽は日常の中の疲れや、ストレス解消など精神面を補うひとつの手段という結果でした。聞いた人の中には「心の栄養剤」と答えている人もいました。このオーディオプレイヤーによって、“音楽を自由に聴く”という動作が改善されることによって日常生活にこの音楽というものをそれぞれの生活により浸透することができるのではないかと感じました。少なからず僕のその一員になりたいと思いました。

## 7. 今回の調査を終えて

今回このデジタルオーディオプレイヤーのレポートを書いて、このような支援機器をしらべるにはでどこが使いやすく、どういうところを改善した方がいいのかなど実際に使いながら、機器自体を吟味しまとめていくことが大切なのだと感じました。

どんな機器でもはじめから完璧なものはないので、それを使うユーザー自身が意見をまとめメーカーに確認していくことは必要だと思います。使いやすい機器を開発するには、「ユーザ・介助者・メーカ」などのつながりが大切なのではないかということをもっと強く思いました。

今後もこのレポートだけではなく、様々な機器を使い意見を伝えて行ければと思います。このような機会を与えていただきありがとうございました。これからの開発の参考に少しでも役立てられれば幸いです。